

Digging Up



立命館大学考古学・文化遺産専攻

2023



五条坂京焼登り窯（旧藤平） 東の窯一の間の様子



五条坂京焼登り窯（旧藤平） 東の窯二の間の様子

序

1985 年に和田晴吾先生が立命館大学に着任されてから、40 年近くがたとうとしています。皆さん、元気にお過ごしでしょうか。予想もしなかった感染症により、2020 年度は学生が大学へ来ることもできませんでしたが、ようやくコロナ感染が弱まり、日常を取り戻しつつあります。その間、高正龍先生が退職され、2022 年度は教員 3 名でしたが、2023 年度からは岡寺良先生を迎えて、ようやく 4 名へと体制を整えました。大学院においては、新たに博士前期課程に 6 名、博士後期課程に 1 名の大学院生を迎える、学部の 4 つのゼミも活発に動き出しました。今年の春は格別ですね。そのような中、卒業生が論文を公開できる刊行物を研究室で用意したいという思いから、刊行が滞っていた立命館大学考古学論集と年報 (Digging Up) を一つにまとめ、考古学実習の発掘調査速報を盛り込んだ内容で、新たな刊行物『立命館大学考古学研究報告 -Digging Up-』を発行することにしました。これは印刷物としても刊行しますが、誰もが読むことができるよう、販売はせずに PDF で公開します。

皆さんの文化財に関する活動や研究の成果を是非お寄せください。これを通して皆さんとともに文化財の保護と活用を考え、考古学研究において切磋琢磨する機会になればと願っています。そして、刊行物として充実したものになればと希望しています。

考古学・文化遺産専攻主任 長友朋子

目 次

2022年度考古学実習の調査概要報告

五条坂京焼登り窯（旧藤平）の発掘調査と三次元計測	木立雅朗	1
--------------------------	------	---

研究論文

近畿・東海・南関東沿岸部における南海産貝類の分布調査	吉田有岐	5
----------------------------	------	---

—打ち上げ貝の破損形態別比率を中心として—

弥生時代の明石川流域集落遺跡における人口研究	木村友哉	17
------------------------	------	----

備前焼大甕の容量変遷とその要因	立花唯翔	29
-----------------	------	----

—内容量記載資料の分析を中心に—

2022年度年報

2022年度の考古学・文化遺産専攻および専修の活動報告	47
-----------------------------	----

五条坂京焼登り窯（旧藤平）の発掘調査と三次元計測

木立雅朗

はじめに

五条坂京焼登り窯（旧藤平）は、1909（明治42）年、京都陶磁器合資会社によって築造され、1943年に藤平窯業（後に藤平陶芸）に移管され、1968（昭和43）年3月まで稼働していた、近現代の京焼登り窯である。

本遺跡の調査は考古学・文化遺産専攻の実習科目「考古学実習Ⅲ」の一貫として、2021年度に実施する予定だったが、コロナ禍のため延期し、2022年8月17日～9月22日に実施した。調査では発掘調査とSfM-MVSを用いた工房の三次元計測を行った。コロナ禍の下、真夏にマスクをした発掘調査になった。なお、発掘現場といえば野外調査が一般的だが、本遺跡では覆屋内の登り窯と工房の調査が主体であった。学生たちは下宿や自宅から通いで観光地・五条坂に通ったが、まだ観光客が十分に戻っていなかったことが幸いであった。本原稿を執筆している2023年4月現在、観光客は急速に増加している。

また、本調査は近現代考古学・民俗考古学、および近代産業遺産の調査であり、一般的な遺跡とは異質な部分を含むが、調査自体は伝統的な考古学の手法を基本としたものだった。三次元計測については近年急速に発掘現場で普及しつつあるものだが、発掘された「遺構」にとどまらず、工房建物全体の三次元計測を試みた点は新たな試みである。

1. 「西の窯、および呂号焼成窯」跡地の発掘調査

五条坂京焼登り窯（旧藤平）は、もともと、東西2基の登り窯が縦に並んでいたという。

しかし、戦時に「西の窯」を壊して「呂号焼成窯」（石炭窯）を築造した。「呂号陶器」（ロケット燃料精製装置）は、ロケット戦闘機「秋水」の燃料を精製する装置であり、耐酸の理化学容器が使用された。

（1）1・2 トレンチの拡張

2016年に設定したトレンチを拡張し、「西の窯」8の間とそれを壊して作られた「呂号焼成窯」（石炭窯）の関係について検討した。その結果、「呂号焼成窯」



図1 1・2 トレンチの発掘作業風景

の後裔と想定される石炭窯の基底部を検出したが、その下層に石炭を含む物原層を確認した。「呂号焼成窯」は戦後のある段階に撤去されて整地しなおし、新たに角窯（石炭窯）が築造されたことがわかった。その後、トンネル状遺構を築造するために、角窯の中央部分が破壊された。このトンネル状窯は部分的な検出にとどまったが、未知の窯の煙道施設である可能性が高く、「東の窯」の煙突に接続していた可能性がある。

2016年の調査で「西の窯」の一部だと判断した遺構の一部は角窯を壊した上に築造していることも確認できた。こうした結果から、この地点では何度も窯が作り替えられていたことが明らかになった。作り替えられた窯は、おおむね、次のような順序だったと想定される。

「西の窯」→「呂号焼成窯」→角窯→未知の窯の煙道+井戸状遺構

地下遺構との対応関係は明らかではないが、このような変遷は鉄製支柱と梁の度重なる追加によっても確認できた。

以上のことから、文献資料や聞き取り調査では知ることができなかった、多様で複雑な実態が明らかになった。

（2）6 トレンチの調査

西の窯の胴木間を発掘すれば、その傾斜角度や規模を明らかにできると考えたが、その想定地点はトイレ



図2 6トレンチの発掘作業風景

や電圧装置などのため、発掘することができない。しかし、その北側には僅かな空き地があり、胴木間周辺に繋がる作業空間を調査することができると考えた。また、西の窯が昭和19年に破脚されたため、掘り込みだったと想定される胴木間部分は埋められた可能性が高い。その埋め土には、当時の製品が含まれており、年代の指標になる可能性があると考えた。そのため、胴木間本体を検出することはできないが、重要な知見を得ることができると考え、胴木間の北側に当たる地点にトレンチを設定した。その結果、明治42年前後に大規模に整地され、その後も何度も盛土・整地されたことが明らかになった。周囲の地形改変が想像以上に大きく、明治末に1m以上の盛土がなされ、その後も何度もわたって盛土がなされ、1m程度嵩上げされたことがわかった。明治末の登り窯築造以後、敷地内の大きな地形改変はなかったと想定していたが、戦後も含めて度重なる盛土が繰り返されていたことがわかった。

なお、2016年の調査に引き続き、本年度も盛土層から僅かに古代末から中世の遺物が出土した。周辺の



図3 9の間 7トレンチの発掘作業風景

発掘調査で平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物が確認されており、本遺跡もその一部に含まれている可能性が高い。

2. 「東の窯」9の間の発掘調査

かつての「東の窯」は現在より傾斜が緩やかであり、途中で盛土をして傾斜を強めている。また、2016年の窯北側の調査では、窯幅を縮小しながら段階的に土を盛り上げていることを確認している。その実態をさらに詳細に確認するため、9の間の中央付近に小トレンチ（7トレンチ）を設置した。その結果、床面は若干嵩上げされていることを確認したが、その下層は盛土が70cm以上続くことを確認した。トレンチ底に太いピンポールを突き刺して盛土の厚さを確認したところ、トレンチ底から約35cmの深さで石、もしくは窯壁などに突き当たった。このことから、少なくとも、床面から1m以上は柔らかい盛り土であり、その下層も遺物で止まっただけで、盛土はさらに厚かった可能性がある。

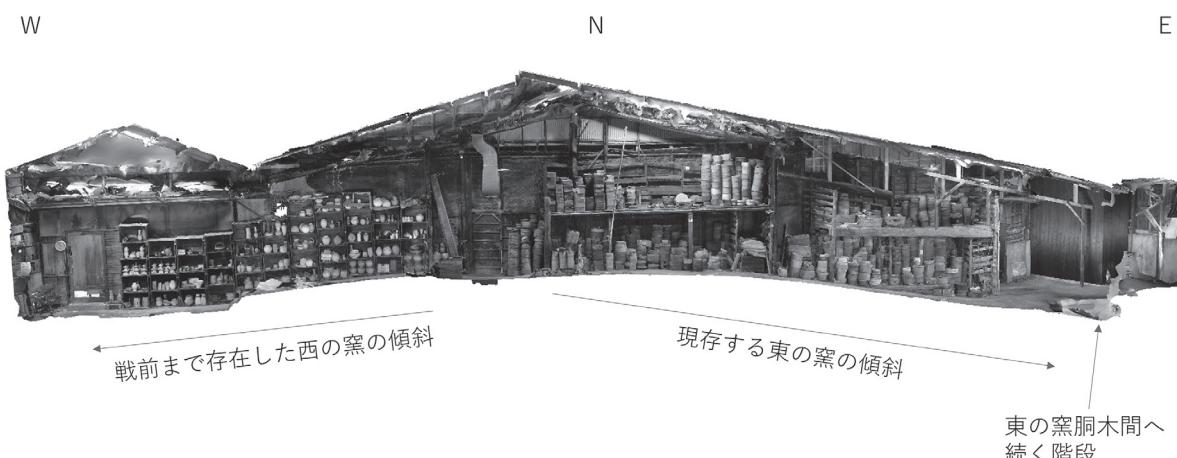


図4 五条坂京焼登り窯（旧藤平）工房北壁の三次元モデル

3. 工房と覆屋の三次元計測

すでに登り窯本体の三次元計測を行っていたため（2022年11月。早稲田大学と共同）、今回は登り窯周囲の工房や道具類の状況、覆屋の構造を記録した。計測に当っては、埼玉県立博物館のナワビ矢麻氏の指導を受けた。登り窯の三次元計測はこれまでも進めてきたが、工房全体は、初めての試みだった。

本工房は操業当時の状況を彷彿とさせる残りのよい状態であり、この雰囲気も含めて記録することを目的とした。死角が多く、完全な測量は困難であったが、現状を記録する新しい試みとなった。

また、1の間・2の間に保管されていた大量のゴウ（匣鉢）を移動し、窯内部の三次元計測を行った。2022年度に登り窯の外形を計測しており、それとの合成する予定である。その際に移動したゴウの計測も行なった。

4. 遺跡をディスプレイする

旧藤平登り窯に学ぶ市民の会のメンバーの提案によって、調査では1の間・2の間に保管されていたゴウ（匣鉢）の半分を元に戻さず、1の間の半分を見学できるようにした。そして、残したゴウで登り窯南側広場に展示場を設置した。ゴウを使った展示台はその後、旧藤平陶芸登り窯見学会が2022年10月15日、（11月5日、12月3日）に開催された。また、五条坂ちゃわん坂ネットワーク「わん碗one展」でも活用され、開睛小中学校の作品展（2022年11月5～7日）が行なわれた。2022年11月5・6日にはその一環として「登り窯にいける」と題した生け花展も開催され（協力：細川未来生流）、登り窯と工房全体が華やかに彩られた。発掘に参加した学生はその様変わりに



図5 ゴウ（匣鉢）を使用した「わん碗one展」

驚いていた。文化遺産を活用した事例として興味深い展示会だった。

おわりに

今回は、未だに感染対策に注意を払わなければならなかつたとはいえ、久しぶりに大きな制限のない発掘調査を行なうことができた。

近現代産業遺産の発掘調査、室内の発掘調査、三次元計測は、通常の発掘調査とは異なつてゐたが、なによりも、コロナ禍から徐々に元に戻りつつある観光地の様子を横目に見ながら、暑い夏の日々を過ごした経験も、得難い経験だったと思う。今回の調査成果が、近い将来、本遺跡の活用計画に役立つよう、遺物の整理と研究を進めてゆきたい。

最後になったが、調査に全面的にご協力いただいた京都市教育委員会教育環境整備室、藤平陶芸、旧藤平陶芸登り窯に学ぶ市民の会の皆様に心より感謝申し上げたい。

